Dystopia としての George Orwell の *Nineteen Eighty-Four*

宮　井　　敏

1948年5月5日付の*Evening Standard* 紙をみると，George Orwell の近況を報じた記事の中に，"His〔Orwell's〕next work, a major novel, is two-third finished."[1] とあって，1945年に出版されるや直ちに23ケ国語に翻訳されたという問題作 *Animal Farm* を書いた作者に対する journalism の並々ならぬ関心と期待とがうかがえるのであるが，さてその the next work であり，また the last work ともなった *Nineteen Eighty-Four* が1949年 Secker & Warburg 社からいよいよ出版される運びとなった肝腎の時には，6月14日付の *Evening News* 紙がつたえるように[2]，("……illness attacked him〔in early summer, 1948〕when he had just finished the first draft.") 年来の宿痾に犯されて，病すでに重く，精根を傾け尽したこの作品がとりわけヨーロッパ世界に与えた爆発的な反響をも見る事なく，作者は翌1950年1月21日，London のとある nursing home で短かい46年の生涯を終えてしまうのである。従ってこの *Nineteen Eighty-Four* は前作 *Animal Farm* とならぶ彼の代表作であり，また同時に遺作ともなっているわけある。

この作品は前記の Secker & Warburg と平行して New York では同年 Harcourt, Brace & Co. から出版されたが（のち Penguin Books,

---

1・2　British Museum, Newspaper Library 調べ。

No. 972, 1954, New American Library, 1962 に収録), その反響たるや出版直後から国内外を問わず非常なものであった。まず英語圏内では, *Times Literary Supplement* (June, 10), *Booklist* (June 1), *Saturday Review* (June 11), *New York Herald Tribune* (June 12), *New York Times* (June 12), *Spectator* (June 17), *New Yorker* (June 18), *Time* (June 20), *Life* (July 4), *Adelphi* (July-Sept.), *Horizon* (Sept.), *Partisan Review* (July), *Readers Digest* (Sept.) 等々の各誌[3]がそれぞれ取り上げ, Christopher Hollis, Lionel Trilling, Philip Rhav, Henry de Villose といった人達が各人各様の立場から, この戦慄すべき恐怖の未来像について競って論評を加えたのである。反響は英米にとどまらず, 翌1950年4月には[4], デンマーク語 (Oversat at Paul Monrad), ドイツ語 (Ubertragen von Kurt Wagenseil), 日本語 (滝口直太郎, 吉田健一共訳), 5月には, スウェーデン語 (Oversättning av Nils Holmberg), オランダ語 (Vertaald door Halbo C. Kool), 6月には, フランス語(Traduit par Amélie Audiberti), 8月には, ノルウェー語 (Oversatt av Trygre Width), 10月には, フィンランド語(Suomentanut Oiva Talvitie), 11月には, イタリー語 (Traduzione di Gabriele Baldini) にそれぞれ翻訳され, また1953年には Poland で Controlled Free Distribution という特異な出版形式でポーランド語訳が, 1957年には Frankfurt am Main から地下出版物の形でロシア語訳が出版されているのである。これは出版直後に11ケ国語に, その後の数年間にさらに12ケ国語に翻訳されて[5]

3 以上 University of London, Senate House, Periodical Library 調べ。

4 以下 British Museum, Reading Room, General Catalogue 調べ。

5 I. R. Willison: George Orwell, Some Materials for a Bibliography (British Museum, Northern Library, Cup 504 e5) による。なおこの資料は Compiled by I. R. Willison and submitted to the School of Librarianship and Archives, University of London, for the diploma in Librarianship (Part Ⅱ) in May, 1953. とあって Orwell の全著作はもとより一切の雑誌寄稿

(次頁へつづく)

まさに世界的な規模で反響を呼んだ前作には及ばないにしても，その与えた影響の深刻さを考えるとなお相当のものと云うべく，この作品が第二次大戦後の世界にいかに強いショックを与えたかがこの一事を以てしても充分うかがえるのである。

Orwell は前作 *Animal Farm* においては，動物寓話 bestiary というとりわけヨーロッパ文学では伝統的な諷刺の手法を用いて，自由と平等を求めて革命によって人間から権力をうばい取った豚の一群が，民主々義社会を築いてゆく過程で結局は一部の権力者の独裁国家に変貌してゆくという推移を見事に caricaturize してみせたのであるが，この *Nineteen Eighty-Four* に到って，自らの諷刺の対象を humour と caricature で処理するという余裕ある態度を捨てて，同じ伝統的手法であるにもせよ，倒錯した逆の形の utopia，すなわち，dystopia[6] の形式をかりて，totaritarianism の政治体制の下でいかに恐るべき人間性の破壊が行なわれるか，いかに全きまでに人間の自由が圧殺されるかを，戦慄すべき未来像として描いてみせたのである。

この未来の1984年には，何回かの世界大戦をくり返したあとで世界は今，中国を中心とするアジア地域を占める Eastasia 国と，ソ連を中心とするヨーロッパ全体を支配する Eurasia 国と，アメリカを中心とする南北アメリカとイギリスを含めた Oceania 国の三大強国に分れており，イデオロギー的にはそれぞれ，Death Worship, Neo-Bolshevism, English Socialism を信奉している。30年ほどまえに原爆が投下されたあと，三大強国はここ25年間，局地的な限定戦争をくり返し乍ら危うい均衡を保ってて い立している。主人公 Winston Smith のすむ Oceania 国では，たびた

論文，序文，ラジオ放送原稿，未発表原稿等を含めた完璧なオーウェル書誌であるが，出版された書物ではないので殆どの英米のオーウェル研究家が見落している資料である。

6 inverted utopia, anti-utopia, nightmare, negative utopia 等いろいろの云い方があるが，最近この表現が定着しつつあるように思われる。

びの権力闘争の結果，Big Brother とよばれる支配者の下に，極端な一党独裁の政治が行なわれており，国家は Inner Party とよばれる高級幹部党員と，一般党員である Party Members と，さらにその下に Prole と呼ばれる非党員一般労働者という構成から成り立っている。New Speak という極端に簡素化された新語を国語とするこの国では，徹底した社会主義経済体制と官僚統制の下で，個人の自由と privacy は一切認められていない。国家の組織は，無慈悲で冷酷なるが故に愛情省とよばれる Ministry of Love (New Speak では Miniluv)，戦争を所管とする平和省 (Minipax)，報道，娯楽を取扱かう真理省 (Minitrue) と，極端な生活消費物資の窮乏にもかかわらず豊富省 (Miniplenty) と呼ばれる経済官庁とにわかれており，主人公 Winston はその Minitrue の Recodep (Record Department) に勤務し，刻々に変わる内外の情勢と政府の処置や声明が矛盾しないように，たえず過去の歴史を書き直す仕事に従事している。国民一般は極度の耐乏生活を強いられているが，巨大なマスコミを支配する政府の手によって国外の敵に対する憎しみをそそりたてさせられており，その上一切真実を知らされていないので大きな不平はない。Winston は同じ省の小説製作課につとめる Julia という女性と知り合い人目を忍ぶ仲となったり，又 Emmanuel Goldstein という国外追放の処分をうけたかっての幹部党員のかいた *The Theory and Practice of Oligarchical Collectivism* という禁断の書物によみふけったりするが，telescreen という各戸に備えられたテレビ兼監視装置の眼をくぐる事は到底出来ず，発見されて投獄され，手のこんだ拷問で洗脳されて一切の反抗をやめ，思想の自由と個性の尊厳を放棄することによって釈放され，そののちは無批判で追従的な党員として生き乍らえてゆく，という筋書になっている。

Orwell の想像力の所産であるこの未来社会では，従ってまとめて見ると，

○大国主義をふりかざす列強の間の絶えざる争いが，弱小国家を吸収系列化してしまい，国際情勢の力学的な極化現象の結果，世界は三大グループに分れて，みすくみの状態にあること。

○しかもそれぞれが力の上で大差ないために，国際的には危うく力の均衡が保たれていて，その膠着状態は「ゲームの理論」に云う「囚人の dilemma」に陥っていること。

○しかも，日常生活の不満から国民の眼を外へそらせるためと，軍需産業に過度に依存する経済体制のために，たえず局地戦争はつづけられていること。

○それぞれの国ではデオロギーの違いは多少あるにしても，本質的には一党独裁の形の Totalitarianism が確立されていること。

○従ってこの政治体制の下では，個人の批判，自由な思考は一切禁止され，その上，思考が極度に単純化され，又巨大な mass communication によって統制される結果，言語も極度に単純化されていること。

○従って又，個性と独創を生命とするすべての芸術に対しては存在の場がなく，文学はとりわけ低級娯楽として機械によって生産されていること。

○個人の生活においても privacy は一切許されず，個人生活は完全に抹消されていること。

○政府首脳部ではたび重なる権力闘争の結果，競争者を排除し得たものが集中的に権力を把握し，極端な個人崇拝を強制していること。

○その結果，最高権力は現在のみならず，過去未来をも支配し，propaganda によって客観的事実をさえ支配していること。

○またこうした集権的な官僚体制の下では「how」という手続き上の問題のみが最も重要視され，「why」何が故にという懐疑は一切許されていないこと。

○そして，この Totalitarian state では恐怖の本質は，年少者による密

告制度のために刑罰や暴力そのものよりも，人が人を信頼出来ない事から来る無形の恐怖に変質していること，などがこのおそるべき未来社会の特質としてあげる事が出来よう。一言にしていえば Oceania 国のモットーに云うように，「戦争は平和なり」，「自由とは隷属なり」，「無智は力なり」という事であり，この表現が決して逆説ではなく，言葉そのままであるところにこの反ユートピアの国の実態があるわけなのである。

ここに見られる，個人崇拝に支えられた集権的な独裁体制，national interests のみを追及しようという盲目的な jingoism, chauvinism, 思考の単純化を強制する obscurantism, personal privacy を禁止する没個性的劃一化，Papal Infalibility（法王不可誤説）にも似た無謬性の主張と護教論的教条主義など，およびそこから派生して来る，歴史的事実の書き替え，bureaucracy のもたらす非能率，密告の奨励，思想統制，報道管制などは，totalitarianism のもつすべての悪しき属性を，ほとんど病的とも云えるほどに鋭い想像力を駆使して，網羅しつくした感がつよいのであるが，作者がこれほどまでの戦慄すべき nightmare を考え出した背景には，健康上の理由もさる事乍ら，彼自身の個人的体験にもとづく面があるわけである。

周知のごとく Orwell は1936年末スペイン市民戦争に義勇兵として参加，翌1937年，負傷して戦場を離脱しているが，彼がイギリスに居る時からそのメンバーであった Independent Socialist Party との関係から，戦場では POUM (Partido Obrero de Unificacion Marxist) とよばれる Marxist group に属したために当面の敵である Franco の率いる Fascist 政権よりも味方であるべき人民戦線内部の主導権争いにまき込まれてしまい，Stalinist-Communists から手ひどい裏切りと弾圧にあい，人民戦線という神話にすっかり幻滅してスペインを去ったのである。[7] この二重内戦

7 「人文学」第95号，拙稿参照。

の泥沼の中でオーウエルがまざまざと見たものは，集中的に権力を握ろうとする彼等の，目的のためには手段をえらばぬ非情さであり，自分達の利害のためには平然とて虚偽の報道を敢てする没倫理性であり，権力に対するおどろくべき執着であった。元来オーウエルにとっては，socialism は厳密な検証を経た一個の社会科学であるというよりはむしろ，社会悪を除去し，社会正義を実現するためのすばらしい手段であり，あらゆる矛盾を即時に解消してくれる何か romantic なひとつの力であったといえよう。従ってこれに対する理解も，緻密な論理的把握よりも，その倫理的側面に対するいわば心情的共感を示すに止まる事が多かったのであるが，又，それだからこそよけいに人民戦線内部の分裂，Stalinists の倫理性の欠如，虚偽の報道などに対しては作家であるという事もあって絶対に許し難いという気持を抱くようになったのであり，その深刻な disillusionment からこのおそるべき nightmare が生まれて来たと見る事が出来よう。

またこの Spanish Civil War における革命と二重内戦という苛烈な現実は Orwell にこれ以上個々の事件に立ちあう事のむなしさを教えた。いいかえれば，普通の realism の手法では克明に内乱と政治的現実のきびしさを描写することは到底出来ないことであり，又，人類の究極的運命に関心をもつものにとっては，微視的な個々の人間感情のあれこれにこれ以上かかずらわっていられないと感ぜしめたのである。その結果取られた表現手段が諷刺ということ，それも人間社会全体を対象として，機構の不備，制度の矛盾，政治のおろかしさを satirize（caricaturize する，より具体的には Totalitarian States における権力志向と人間不在を痛烈に諷刺すること）であり，それがすなわち *Animal Farm* における bestiary 動物寓話[8]となり，*Nineteen Eighty-Four* における dystopia 反ユートピアとなっ

8　動物寓話の形を籍りた諷刺文学には Karel Capek の *The Insect Plays*(1921), *War with Mewts* (1937), 近くは Pierre Boulle の *La Planéte de Singes* (1963) などがある。

たわけである。

こうした，ある特定の時代の社会全体を綜合的に諷刺の対象としてとり扱う文学には，ある特定の事件や人物，又は，ある社会に固有の風俗や習慣をとり上げて satirize する一般の諷刺文学とは自から異なった形式があり，それが Thomas More にはじまり， Plato にさかのぼるもろもろの Utopia 文学の大きな特徴の一つとなっている。それは時間又は空間，又はその双方の次元に於て現実から隔絶した一つの場を設定して，そこに立体的な空想社会を想像力によってつくり上げるという事なのであるが，この発想そのものは必ずしも文学に固有のものではなく，ある事件の下での現象の観察のために社会科学者がしばしば用いて来た手法であり，例として云えば，「マルクスのロビンソン」や農業経済におけるチウネンの「弧立国」などがただちに上げられよう。問題は何よりもまずそれが「文学」でなければならないという事であり，決して単なる恣な空想の所産であってはならないわけである。幼児の想像が産み出した「お菓子の国」という考え方は次第に発展していわゆる「逸楽境」Cockayne Land となるのであるが，これが Utopia と何の関係もない事は云うまでもない事であるし，また未来小説が単なる Science Fiction でないのは， E. A. Poe のいくつかの短篇がそのままで充分探偵小説と呼びうるが，だからと云ってすべての detective stories が決して文学とはなり得ないのと同様あきらかな事なのである。

また，時間乃至は空間を隔絶して想像の上に築き上げた空想社会に対する作者の Weltanschauung によって， それは極めて理想主義的色彩の濃い正統派の Utopia と， pessimistic な態度で絶望のうちから未来を予見する dystopia とに分かれるのであるが，現実批判としての機能から云えば，いかに狂気の nightmare の産物であると云われようとも， 後者の方がその指摘の鋭さとはげしさに於てはるかに前者よりまさっている事は論

をまたない。従って情報科学の高度の発達と computor の援用によってかなりな程度まで未来についての予測が可能となり，そこからさまざまの未来論 futuology が今日生まれて来てはいるのであるが，これが computopia という言葉でも知られるように極めて optimistic な態度から現状肯定の上に立っての未来論であるかぎり，dystopia としての未来小説とはこれ又，無縁のものと云わざるを得ないのである。

従って，Eugene Burdick & Harvey Wheeler jr. の *Fail-Safe* (1962) にしても，Fletcher Knebel & Charles W Bailey II の *Seven Days in May* (1962) にしても，それぞれ5年後の1967年，12年後の1974年のアメリカにおける，前者はボタンの押し間違いからおこる核戦争の勃発を，後者は統幕議長によるアメリカのクーデターの発生を描いたものであるが，いづれも現実の社会機構の中にそうした事態が起りうる factor が存在する事を精密に指摘した上で，恐怖と戦慄をもってその可能性を示しているのである。[9]

さて Orwell は *Nineteen Eighty-Four* に於て35年後という未来時間における同じブリテン島という空間を場として，Engsoc と呼ばれる Totalitarianism の政治体制の下で，人間の身の上に果して何がおこるかをまざまざと描いてみせたのであるが，この未来小説が以上のべて来た如く，現実の諸条件の中にそうした恐怖すべき未来が招来しうる充分な可能性がある事を前提として書かれている点で，これは決して「狂気の悪夢」でもなく，又，「死の床の hysteria」の産物でもなく，極めて冷静に計算された権力という政治現象の究極の帰決としての全体主義国家の未来像であるといえるのである。またその故にこそ作者の恐怖は読者の恐怖となり，その鋭い説得力が国際的にも大反響をまき起す結果となったものであろう。

9　他にフランスは Philippe Alexandre の *Le President est Mort* (1966) がある。

もちろんこの作品に対して批判がないわけではない。まず，政治現象の把握そのものが極めて通俗的な把握にすぎず，高度に複雑な政治内部の問題を理解していないという批難がある。たしかに， Orwell は主観的には socialist group である Independent Socialisti Party の member であった，と云っても所詮は作家のこと，利害の錯綜した政治の内幕に通暁出来る筈もなく，又その観察も表面にあらわれた現象や事件にとどまる事が多かったと思われる。けれども，もろもろの政治機構が避け難くその内部に包懐している「妥協」と「必要悪の概念」に麻痺してしまっている政治の玄人に対して，その無原則と没倫理性を指摘するのが他ならぬ素人の役目だとすれば，この批判は甚だ見当違いであると云わざるを得ない。むしろ，Orwell は「知識人の組織参加」の限界をふまえた上で政治における amateurism を厳守しようとしたのではなかったろうか。

また Orwell は Communism と Fascism とを混同して，後者の悪しき属性を前者に追被せているという批判がある。非常に厳密な意味で彼が Totalitarianism という言葉の下で果してどのような概念を抱いていたかは実は明らかでない。けれども両者に共通する dehumanization, obscuratism, oligarchy などの諸要素をいわば「政治悪」として告発することは必ずしも的を外れたものではなく，むしろ，たとえば Karl Enzensberger などの発言とも共通した非妥協的な鋭い指摘として積極的に評価しなければならない側面であろう。しばしば読み誤まられているが，この悪夢の未来社会の舞台は Engsoc という ideology の下に支配されているブリテン島であって，モスクワでもベルリンでもない。従って最終的には Communism も Fascism も socialism も権力志向型の政治形態をとる限り必ずこういう結果になるのだというのがこの作者の予言であるという事をあらためて確認しなければなるまい。

また未来小説というものが想像力の所産である限り，作家はその豊富な

想像力を駆使して空想社会の細部に到るまでを組み立てて見せ，かつその予測は或程度適中しなければならないとする Aldus Huxley などを含めた意見があるが果してそうであろうか。まず云える事は同じ未来といっても，この *Nineteen Eighty-Four* や前記の *Fail-Sail, Seven Days in May,* 或は *Le President est Mort* など，少し古いところで Eugene Zamyatin (1884–1937) の We (*circa* 1920)（仏訳 *Nous Autres*）や Bruno Jasinsky の *Burning Paris* (1929) などのように比較的近似の未来に視点を据えたもの[10]と，上記 Aldus Huxley の *Brave New World* (1932), *Brave New World Revisited* (1959), 近くは Ray Bradbury の *Fahrenheit 451* (1953) などのように，かなり遠い未来に所定時間を設定したものとでは，取扱う基本的な姿勢にかなりの隔りがあるという事である。前者の場合には場として想定された時間が近い将来であるため現実の状況との距離が少なく，そのために現在の条件とのかかわりあいが密接であり，逆に云うと，それだけ想像力を働らかせる余地が少ない事になり，又，多く政治的状況についての未来の帰決を予見する形をとるものであるが，後者の場合はそれが遠い将来であるため現実に対する topical allusion をはなれて，自由に想像力を駆使して，人類文明全体の運命を予言する形になる事が多いのである。その意味では Huxley と Orwell とでは同じ未来小説であっても厳密にはそれぞれ別の genre に属するものと見るべきであり，その差は kind の差であって決して degree の差ではない。Emmanuel Goldstein の姿に Trotsky を見，洗脳と拷問に枢機卿 Joseph Mindszenty の事件を思い出し，Oceauia 国の通貨が dollar である事にドルの支配体制下のポンドの運命を考えるのも，普遍的な人間社会の未来のさまざまの状況を Brave New World の中に見るのも，又それぞれに深い意味をもつものと考えられるのである。

---

10 外に Jack London の *The Iron Heel* があげられる。

問題はこうしたさまざまな批判をこえて，Orwell が我々に語りかけている本来的な意味を率直に考えるということであり，“Truth, but not Fiction”(ここに書かれている事は，或は本当かも知れない，だがこれは断じて小説といえるようなしろものではない)というような批判，或は paranoid fantasies の産物であるとか，claustrophobia の患者の悪夢であるとか云った，真面目にうけとめようとしないで茶化しているような評言は，問題の重要性を認めつつもその倭少化をはかる無責任な態度としか云えないであろう。

Orwell 没後20年，その間に国際情勢はさまざまに変化して来た。ある時点に於ては，彼の予言が迫真力をもって適中するかと思われ，又，次の段階ではそれは滑稽で誇張されたたわ言とも見做された。だがそうして殆ど力学的なエネルギーで離合集散をくり返す 国際政局の現象的な変化をこえて人間社会がややともすれば陥りがちな危機的状況が現実の諸条件の中に絶えず内包されているのだという彼の指摘が old-fashion になってしまう事は決してないだろう。それは個と全体との基本的なかかわりに於て最も本質的な問題に常につながっているからである。